



新時代の農業人育成プロジェクト

2020年9月 第5号

■発行: 横須賀商工会議所
横須賀市平成町2-14-4 ☎046-823-0421

■編集: (株)タウンニュース社 横須賀編集室



横須賀商工会議所
6次産業化を応援!

■「産農人」とは農作物をつくるだけでなく、市場ニーズを理解し流通させることのできるマーケットセンスを持った新しい農業人を表す造語。横須賀商工会議所と地域の農家・加工業者・飲食店・メーカーが一丸となって、将来の農業を担う有用な人材の育成に取り組んでいます

「産農人」3期生始動

新しい農業のカタチ 実践で学ぶ

新時代の農業人を育成する「産農人」プロジェクトは7月、新メンバーを迎えて3期目の活動がスタート。

今期は新商品開発をメインテーマに据え、学校の枠を飛び越えた実践型研修を進化(深化)させる



大沼 侑汰さん
県立三浦初声高校
都市農業科(2年)

新加入

富城県で米や野菜、花き栽培を行う祖父の跡を継いで農業に従事すると決めている。実践的な農業経営を学ぼうと「産農人」の活動に参加した。一方で農業の将来性については不安もある。加品の開発など、新しい発想を持つてチャレンジを考えている。

農業経営の先端に触れる



長島 未歩さん
県立三浦初声高校
都市農業科(3年)

実家がイチゴ農家。観光農園も営むが、昨秋の台風被害に先の新型コロナの影響で経営は大打撃。農業の厳しさ、リスクとの向き合い方について、考えずにはいられない経験をしたという。リスク分散の一つの答えが加工品の開発。昨年、大学受験を控える身であり、時間的制約と闘う日々。「管理栄養士の資格を取得して、農業の新しい価値を見いだしたい」。全ては「強い農業」を確立するためだ。

加工品開発で“強い農業”



シトコウチニヨケンジさん
県立三浦初声高校
都市農業科(3年)

自然に触れていたい——そんな単純な動機で参加した「産農人」の活動だったが、1年が経過して、漠然としていた将来像が明確なものとなつた。
「沖縄で農業をやる」。石垣島の牧場でアグー豚の飼育に携わるか、最北エリアでマンゴーの栽培

春の卒業後に移住する計画を立てている。

2年間ほどアラジルで暮らしていた。そこでは、昨年他界した祖父が農業

ルーツに近い環境が沖縄にある。かつての記憶を思い出させてくれる

未来につながる学びがある



佐藤 藍音さん
県立三浦初声高校
都市農業科(3年)

生産技術だけではなく、市場分析や加工食品の開発など幅広い視野で農業を学べると先輩から聞き、「産農人」への参加を決めた。

「農業」はまだ上手くイメージできないが、「(産農長を追いかける圃場(畑)での実習が一番好きだ。」

将来の職業としての土とたわむれ、そよ風に吹かれながら作物の成長を追いかける圃場(畑)の活動を通じて何かを掴みたい

「農業」を考へるきっかけ

コロナ自粛期間中は「産だ。アを実戦投入するつもり

一方で農業の将来性に大学でも学びたい。自宅は横浜市の桜木町。電車通学時間にそんなどとを考えている。

食品加工にひとたならぬ興味を持っている。「素材となる野菜や果物の特性、生育環境を理解することが商品開発の役に立つ」。農作業実習にも向きな姿勢で取り組み、知識と経験を身につけてきた。

溜めたアイデア実戦投入



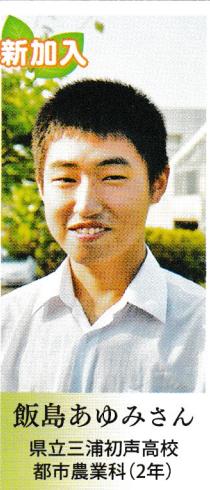
秋元 琉柳さん
県立三浦初声高校
都市農業科(3年)

農業を仕事にしたいと考えている非農家出身。小学生の頃から土いじりが大好きで、家庭菜園の真似事をしていた。

プロの農業経営者から直に学べる「産農人」の機会は「我が意を得たり」の心境。就農に向けて知識と経験を積む日々だ。

農人」の活動もストップを余儀なくされたが、この間に自宅でスイーツメニューの開発に勤しんだ。今期は自分たちが育てた野菜を用いて、「加工販売—PR」を一貫して手掛ける。溜めたアイデ

「非農家の夢」実現する場



飯島あゆみさん
県立三浦初声高校
都市農業科(2年)



協力農家 鈴也ファームでの実習風景

